

SHOW-MAXシネマーム

★★★★

パニック・ルーム

2002(平成14)年5月20日鑑賞



監督: デビッド・フィンチャー
出演: ジョディ・フォスター/フォ
レスト・ウィテカー/ドワイ
ト・ヨーカム/ジャレッド・
レト/クリステン・スチュワ
ート

みどころ

パニック・ルームとはよく名づけたもの。少し構成に無理はあるものの、変わった面白いサスペンス・スリラー映画。ジョディ・フォスターの、娘のために戦う姿だけで2時間持たせている。

〈変わった設定の映画〉

これは何とも変わった設定の映画。ニューヨーク・マンハッタンの高級住宅地内の大富豪が残したお屋敷には、鉄のフレームとコンクリートで固められ、外からは絶対に侵入できない「パニック・ルーム」が設置されていた。

パニック・ルームには専用の電話回線がひかれ、中からは16台のビデオカメラと8台のモニターで外部を監視することができ、また外部への音声によるアナウンスができる。しかし外部からは絶対にパニック・ルームの中を見ることはできないし、話しかけることもできない。そして絶対にそこに入ることもできない。

大富豪は、なぜ巨費を投じてこんなバカげた部屋を作ったのか?その目的はただひとつ。決して誰も侵入させないこと。

〈引越しも大変・・・〉

離婚したばかりのメグ・アルトマン(ジョディ・フォスター)は、10才の娘サラ(クリステン・スチュワート)を連れて家を探している時、この4階建てエレベーター付きの家を紹介され、即座に入居を決定する。

私たち日本人の家屋敷の感覚からすると、一体どんな人種がこんな家に住めるのかと不

思議に思ってしまう。また、引越しや片づけも大変だろうな、と無用なおせっかくやいらん心配をしてしまうが、この際そんな「島国根性」のひがみは横において・・・。

事件は、メグとサラが引越したその日の晩におこった。3人の男が準備万端整えて、パニック・ルームの中に隠された遺産を盗むためこの屋敷に侵入してきたのである。

3人組のデータでは、この屋敷は「空家」だ。現に昨日まではそうだったのだ。

ところがこの屋敷に侵入した3人組は、今日引っ越ししてきた母娘をどう扱うかという問題に直面することになった。

そこで3人の意見は分かれしていく。そして3人組とメグやサラとの「闘い」を通じてその意見対立は深刻化し、最後にはついに仲間割れ・・・。

＜ジョディ・フォスターの魅力＞

主人公メグを演じるジョディ・フォスターは、何と言っても、91年のアカデミー賞主演女優賞を獲得した『羊たちの沈黙』がすばらしかったが、彼女はレイプの被害者を体あたりの演技で熱演した。88年の『告発の行方』でもアカデミー賞主演女優賞を獲得しているすごい女優だ。『告発の行方』では、ミニスカートをはき、男たちを挑発するように遊技台の上で踊る、小悪魔的なキュートな女の子を演じ、『羊たちの沈黙』では、FBIの理知的なクラリス特別捜査官をみごとに演じた。

『羊たちの沈黙』に続く『ハンニバル』(2001年)には当然彼女が出演するものと思っていたのが、なぜか彼女はこの役を受けず、新人ジュリアン・ムーアに譲った。

そしてジョディは、この『パニック・ルーム』におけるハードアクションを、何と妊娠中の身重の身体で演じていたということだ。

映画の中で彼女の衣裳は、そのほとんどが黒いパンツに黒のタンクトップ。せっかくの華やかさを持った美人女優なのに、そのような美しい姿は全く見せてくれない。娘を守るために、パニック・ルームを砦として、鬼のような形相で屈強の3人の男と勝負する姿がほとんどだ。

＜ジョディのこの映画へのこだわり＞

当初メグの役はニコール・キッドマンに決定しており、2週間程撮影も行われたが、キッドマンは『ムーラン・ルージュ』(2001年)の撮影の際に痛めた膝が悪化し、その手術のために降板したことによってジョディにこの役が回ってきたということだ。またジョディはカンヌ映画祭の審査委員長というオファーをいったん引き受けていたが、その後にこの映画への出演が決まったため、その大役を辞退してまでこの映画にこだわったとのことだ。

そしてその理由は、何よりも尊敬するデビッド・フィンチャー監督と仕事をしてみたいと思ったことだそうだ。そういうめぐりあわせや背景事情を聞くと、なるほど、この変わ

った状況設定の映画への興味が一層深まってくる。

＜映画のスパイは娘のサラ＞

この映画にスパイを効かしているのは、10歳の娘サラが糖尿病の病気を抱えていること。そのためどうしても注射が必要であり、ずっとパニック・ルームの中に隠れていることができないという設定が説得力をもってくる。そして何よりもこの難しい役を演ずるサラの演技がすばらしい。

パニック・ルームに籠城して3人の男と対決する母と娘という変わった設定だが、ずっと緊張感を保ちながら最後まで観ることができる、いい映画だ。もっともこれは、ジョディ・フォスターという女優の魅力のために、多少私の採点が甘くなっているのかかもしれないが・・・。

2002(平成14)年6月7日記